

青少年の居場所

良い関係とは何か

経済学部 4年 阿部由希

目次
良い関係とは何か 阿部由希
ボランティアをして 自分自身の変化 松本力哉
フットサルのボラン ティアを通して 清水浩平
初めての経験 榎本航太



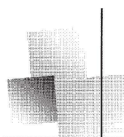
私は「青少年の居場所」でボランティアを始めて1年半が経った。最初のころに比べて、児童や生徒・社会人の方々と話すことができるようになり、コミュニケーション能力が高まったと感じている。

特に、児童が下を向いているとき、自分はどんな声をかけたらいいのか分からず、見てみぬふりをしてしまう場面が多かった。このような場面では、どういった声をかけるかも大事であるが、まず子どもに声をかけてあげることが大事だと学び、実際に行動することができるようになった。こういった行動が、児童や生徒との関係をより良いものにすると考えられる。

では、良い関係とはどんな関係のことを指すのか。フットサルの活動では、小学生は小学生同士、社会人や中学生・高校生は混合で試合をしている。中学1年生は小学生から学年が上がり、サッカー部に入った生徒が多い。去年までプレーしていたサッカーとは違い、中学生は速く、頭を使ってプレーしなければならなくなる。戸惑いや悩みを抱えている生徒が「青少年の居場所」の活動時に来て、相談をする生徒もいる。こういった生徒との関係は良い関係であると考えられる。生徒との間に信頼関係が結ばれているからである。

しかし、児童との関係を良い関係と言えるのか疑問を感じている。児童からみれば自分はお兄ちゃんのような存在である。社会人とは違う感覚でコミュニケーションを取っていると感じる。良い関係であると感じるのは、児童の方から気軽に話しかけてくれるなど打ち解けられていることである。しかし、ダメなことを曖昧にして、注意しても聞かない態度を取る児童との関係は良いものとは言えない。例えば、試合の待ち時間中に、児童から「よしき」と呼ばれたり、パンチやキックを受けたりするようになった。また、注意をするものの、聞く耳をもたず、ふざけている態度が感じ取れることもある。これは『狎れ』から起きるものであり、悪い関係と捉えられる。私は解決策として、『狎れ』をそのままにしておくのではなく、メリハリをつけた接し方をしていくことが必要であると考えられる。児童と楽しむときは楽しむ、やってはならないことはダメだとしっかり区別をして教えるようにすることで、より良い関係を築けると考える。

これから教員になる上で、児童や生徒との関係はとても重要である。お互いが信頼しあえる関係を築けるように、より多く児童や生徒とコミュニケーションを取っていく必要がある。そのための経験をこれからも「青少年の居場所」で学んでいくようにする。そして、その経験を様々な場面で生かしていこうと考える。



ボランティアをしての自分自身の変化

経済学部 2年 松本力哉

私が青少年の居場所というボランティアを知ってから、半年以上たつことになりました。大学2年生になり、大学に慣れたのと同時に教職の勉強もどんどん本格的になっていっています。私が参加することがしばらくできていなくても、「青少年の居場所」で行かせてもらっている中丸小学校で活動している皆さんは私の事を覚えてくれています。活動先の小学校の体育館には、小学生から社会人までと本当に幅広い年齢の方々がいますが、半年もたつと大分慣れてきて、初めて行った時と比べると気軽に話しかけることができるようになったと思います。小学生達は私の方から話しかけないと、やはりなにか恥ずかしそうにしているときが多いですが、いざ話しかけてみると本当に元気で、いつも学校でどんな遊びをしているかなどを笑顔で教えてください。私は生まれが関西なので、標準語の人が多く関東では小学生たちは珍しく思っているようで最近では、その話し方がいいねとか、教えてとか小学生から言われるときもあります。少しは小学生にもなじめてきたのかもしれません。社会人の方々と話すことも増え、初めの頃はフットサルをやりにきているのに、緊張してアドバイスを聞く所ではなかったのですが、この頃はどうか自分がかうまくなるのかななどを教えていただいています。そういう面で、関わり方が少しずつ変化しているのではないのかなと自分自身で思うことがあります。スポーツでコミュニケーションをとるということは本当に大切だと実感しました。

5月も終わり、6月にさしかかろうとしています。「青少年の居場所」での活動は、授業が6限まであるなどでいけないこともあります。中丸小学校という場所は私にとって本当に楽しくかけがえのない場所となっています。これからこの活動でたくさんの人と関わっていく上で、自分から話しかけるのを心懸けたいです。コミュニケーションをとるといふ難しさはずっとあるものだと思いますが、これまでの「青少年の居場所」で学んだことを生かし、自分からアクションを起こせる人間になろうと思います。自分から話しかけなければ、相手の

事は何も知ることができないし、わからないままです。

何でも相手がやってから動くのではなく、自分から動くことが重要であるのだと思います。これからも、「青少年の居場所」での活動で学ぶことはたくさんあると思います。迷惑をかけることもたくさんあると思いますが、活動を通して自分自身がもっと成長できるように頑張っていきたいと思います。

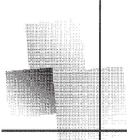
フットサルボランティアを通して

外国語学部 2年 清水浩平

今年の4月に初めて学校ボランティアの活動に参加してから、早いもので2ヶ月が経ちました。私はフットサルの活動のほうへ参加していますが、一緒にフットサルをやっている人達は皆良い人ばかりなので、自分自身とても楽しく活動ができていると感じます。まだ活動を始めてから日は浅いのですが、ここまで活動できて感じたことを自分なりにまとめ、今後につなげていきたいと思っています。

フットサルの活動に参加している子どもたちとは、試合中に対戦相手としてプレーしたり、自分がプレーしていない時間帯に声をかけてあげたりすることによってコミュニケーションをとっています。小学生はまだまだ動き方がわからず、仲間の選手がボールを持ってどこに動けばいいのかわからないといったことがよくあります。そのようなときに「失敗してもいいからチャレンジしてみなよ」と声をかけたあと、小学生がいきなり動き出しをして、ゴールを決めることが出来た時がありました。そのときは自分のアドバイスを素直に受け止めて実行してくれたことにとても感動しました。また、自分の行動は子どもたちに影響を与えることができるということも実感しました。

自分もプレーをしながら小学生のプレーを観察して、その子がどんなことを考えてプレーしているのかということを見るのは簡単なことではありません。より広い視野で全員を観察したり、試合の合間に話をしたりすることによって、少しずつ分かるようになっていくのだと思います。活動開始日からまだまだ日が浅く、自分が



思い描いているような児童との関係性はまだ築けていないので、この点に関しては今後の課題としてしっかりと取り組んでいきたいと考えています。

青少年の居場所に週1回しか参加できない私にとって、1回1回の活動はとても大事な時間となっています。しかし限られた時間の中で、自分にできることを精いっぱい行うことで自分自身も成長できると思います。また今の時期に小学生ともしっかりと積極的にコミュニケーションをとったり、アドバイスをしあげたりする経験を積むことによって、将来自分が教員になった際に、子どもと円滑なコミュニケーションが取れるようになりたいです。また、教員ではない私が大学生のうちから児童と関わりを持つことができるという、この恵まれた環境に甘えることなく、今後も精力的に活動していけたらよいと思います。

初めての経験

人間科学部 2年 榎本航太

私は教員を目指すものとして、少しでも生徒のことを理解できるようになろうと思い、学校ボランティア「青少年の居場所」に参加した。活動にはまだ2回しか参加していないが、まずはバンド活動、楽器演奏という自分の特技を生かして生徒と触れ合い、より一層生徒たちとの距離を縮めることを目標としてこれからの活動に意欲的に参加していきたい。

活動に参加するにつれて、生徒たちが私の名前を覚えてくれるようになり「航太」と下の名前前で呼んでくれる生徒もいる。はじめのうちは敬遠されてしまうのではないかと不安だったが、生徒たちの明るさが私の不安を払拭してくれた。これから多くの活動を通じて生徒たちから信頼されるような存在になりたい。

2回の活動で気付いたことは、自分から生徒たちに対してアクションを行わなければ、何も始まらないということである。

1回目の参加のとき、担当の貝川さんに「ドラムの子をみていてくれ」と言われ、私はドラムを担当する小学6年生についた。最初は何をすればいいかわからなくて、ただ「みているだけ」だった。練習の妨げにならないように、生徒が質問をしたりアドバイスを求めてきたときだけコミュニケーションを取ろうとしていた。しかし、30分くらいお互い無言の状態が続いてしまったため、少し話してみようかと「どこか難しいところある？」ときいたところ、楽曲の中で数か所叩き方がわからなかったり、叩く場所が間違っていたりした。「わからなかったら僕に聞いてね」というと、その生徒は初めて活動に参加した私に対して気を使ってしまったようで「話しかけづらくて…」といった。それから私は積極的に生徒に話しかけ、コミュニケーションをはかった。そうすると今度は生徒たちの方から話しかけてきてくれて、とてもいい雰囲気でのその日の活動を終えることができた。

消極的で受け身になるよりも自分から生徒に向かっていけば、生徒も心を開いて話しかけてきてくれるようになり、信頼関係を築いていけるようになる感



じであった。

2回の活動での反省点は2つある。

一つ目は、生徒への注意の仕方である。やはり小学生は元気があり、練習中も集中力が散漫になって友達と遊び始めてしまう生徒もいる。その生徒に対しての注意の仕方が分からず、最終的に貝川さんや保護者の方が注意を行っていた。小学生に対してどのような口調で、またどのような内容の注意をしてよいのかが瞬時に判断できなかったのも、次からは「みんな頑張っているから、練習に戻ろうか」といった注意、声掛けができるようにしたい。

もう一つは、生徒たちと仲良く話をするあまり、つい活動とは関係ないアニメの話や、テレビ番組の話をしてしまい、結果的に生徒の練習の邪魔をしてしまっているケースが何度もあった。コミュニケーションをとることの重要性を念頭において、生徒たちの集中を削ぐような話題にまで発展させてしまったときは、練習に戻るよう注意を行っていききたい。

以上の反省点を生かし、次回からの活動を行っていききたい。



発行日:2014年7月23日

発行所:神大ユース・サポート・プロジェクト(JYSP)

TEL : 045-481-5661(内線4352)

FAX : 045-413-4154

E-mail : jysp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp

URL : http://www.kanagawa-u.ac.jp/Teacher_training_course/jysp/